

## 第5章 人的要因別火災状況

### 1 高齢者

- 出火件数、死者が前年と比べて増加しました。
- ガステーブル等による火災が最も多く発生しています。

#### (1) 火災状況

ここでいう「高齢者」の火災とは、65歳以上の高齢者（以下「高齢者」という。）が行為者となった火災をいいます。

平成25年10月1日現在、全国の65歳以上の高齢者の人口は、推計で前年同月よりも110万5千人多い3,189万8千人で、日本の総人口の25.1%を占めています。また、平成26年1月1日現在、東京都内に住む高齢者は、東京都の総人口の21.4%にあたる284万5千人となり、人口、割合ともに過去最多の数値となっています（総務省・東京都調べ）。

#### ア 年別火災状況

最近10年間の「高齢者」の火災は表5-1-1のとおりで、平成25年は511件発生し、前年と比べて14件増加しています。

表5-1-1 年別火災状況（最近10年間）

年 別	火災発生件数											損害状況			
	合 計	建物					林 野	車 両	船 舶	そ の 他	焼 損 床 面 積 ( $m^2$ )	焼 損 表 面 積 ( $m^2$ )	損 害 額 (千円)	死 者	負 傷 者
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や									
16	457	416	32	30	89	265	-	4	1	36	6,089	1,440	1,067,892	34	241
17	502	458	31	35	108	284	-	9	-	35	7,850	2,868	1,079,981	52	258
18	445	402	30	31	95	246	1	13	-	29	6,612	1,705	1,285,507	38	204
19	509	462	44	32	117	269	-	11	-	36	7,545	2,578	1,263,785	57	270
20	514	471	32	25	125	289	1	7	-	35	7,453	2,664	1,076,481	54	225
21	562	516	41	25	124	326	-	10	-	36	6,769	2,335	1,091,607	51	216
22	426	380	30	22	91	237	1	11	-	34	4,486	1,118	825,327	33	181
23	494	429	27	24	86	292	1	16	-	48	4,853	1,536	638,523	27	227
24	497	459	22	33	97	307	-	5	-	33	5,020	1,401	578,786	43	196
25	511	450	27	20	82	321	2	16	-	43	4,314	1,387	925,063	45	191

火災による死傷者をみると、死者が前年と比べて2人増加の45人、負傷者は前年と比べて5人減少の191人発生しています。

高齢者の火災の特徴的な傾向として、そのほとんどが住宅や共同住宅といった居住関係の用途で発生していることが挙げられます。

さらに、核家族化による一人暮らしの高齢者が増加していることから、近隣相互の共助体制構築が必要です。

このため東京消防庁では、高齢者等の災害に弱い立場にある方の暮らしの安全を守るため、様々な対策に取り組んでいます。

## イ 高齢者の火災の月別発生状況

月別発生状況をみたのが、表5-1-2です。

火災の多発する時期である1月から3月と、12月に計225件（44.0%）発生し、その中でも1月と2月は各61件（11.9%）と最も多い火災件数となっています。

また、65歳以上75歳未満の高齢者を前期高齢者、75歳以上の高齢者を後期高齢者として分類してみると、前期高齢者が251件（49.1%）、後期高齢者が260件（50.9%）それぞれ発生しています。

表 5-1-2 高齢者の火災の月別発生状況

区 分		月 合計	月											
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
火 災 件 数		5,190	502	496	518	418	437	336	406	376	351	381	454	515
高 齢 者 の 火 災 件 数	合 計	511	61	61	52	37	33	38	33	27	23	46	49	51
	前 期 高 齢 者	251	31	27	31	18	17	20	15	12	12	23	25	20
	後 期 高 齢 者	260	30	34	21	19	16	18	18	15	11	23	24	31
発生率 (%)		9.8	12.2	12.3	10.0	8.9	7.6	11.3	8.1	7.2	6.6	12.1	10.8	9.9

注1 火災件数は、管外からの延焼火災を除いています。

2 発生率は、火災件数のうち高齢者の火災が占める割合を示したものです。

## ウ 時間別発生状況

出火時間が不明の20件を除いた491件から時間別の発生状況をみると、昼間時間帯である7時から18時台にかけての時間帯で332件（67.6%）発生しています。

1日を通じて最も多く発生している時間帯は17時台で43件（8.8%）発生しています。次に多い発生時間帯は10時台で31件（6.3%）発生しています。

発生件数の多い時間帯は、食事あるいはその準備及び休憩をとる時間帯であり、ガステーブル等の調理器具や電気ストーブ等の暖房器具による出火が一因と考えられます。

## エ 建物用途別発生状況

高齢者の火災のうち、建物火災は 450 件で、そのうち建物以外から出火した火災は 11 件発生しています。以下、行為者が高齢者で建物から出火した火災 439 件について分析します。

行為者とその年齢が判明している建物から出火した火災 1,804 件を居住関係（住宅・共同住宅）と居住関係以外に分けて示したものが表 5-1-3 です。

行為者が高齢者で建物から出火した火災 439 件のうち、居住関係の用途では 376 件（85.6%）発生しており、高齢者以外の火災に比べて居住関係から発生する割合が高くなっています。

表 5-1-3 居住用途別建物火災発生状況

区分	火災 建物から 出火した 件数	居住関係			発生率 （％） 居住関係 からの	居住 関係 以外
		小計	住宅	共同 住宅		
合計	1,804	1,263	473	790	70.0	541
高齢者以外の火災	1,365	887	274	613	65.0	478
高齢者の火災	439	376	199	177	85.6	63

## (2) 出火原因別発生状況

総火災件数 5,190 件（管外からの延焼火災を除く。）のうち、行為者とその年齢が判明している火災は 2,214 件ありました。以下、これについてみていきます。

高齢者と高齢者以外の主な出火原因別発生状況を表したのが、表 5-1-4 です。

主な出火原因別にみると、高齢者の火災で最も多いのは「ガステーブル等」が 129 件（25.2%）、次いで「たばこ」が 75 件（14.7%）、「電気ストーブ」が 30 件（5.9%）、「たき火」が 24 件（4.7%）、「ロウソク」が 17 件（3.3%）などとなっています。「ガステーブル等」による火災は、揚げ物調理中にその場を離れて忘れてしまったり、着衣がこんろの火に接したりして発生しています。

事例 1 ガステーブルで調理中に着衣に着火したため出火した火災（10月・武蔵野市）			
構造・用途等	防火造 2/0 住宅	出火階・箇所	1階・ダイニングキッチン
焼損程度	建物ぼや 着衣若干 負傷者 1人		
この火災は、火元者（80歳代女性）が、フライパンを使用して調理中、着ていた割烹着の袖口にガステーブルの火が着火し出火したものです。			
この火災では、ダイニングキッチンにいた火元者の娘が火元者の叫び声で火災に気づき、水道水をかけるなどして初期消火を行いました。火元者が怪我を負っています。			

表 5-1-4 高齢者と高齢者以外の主な出火原因別発生状況

区 分	合 計	主 な 出 火 原 因										
		ガ ス テ ー ブ ル 等	た ば こ	放 火	大 型 ガ ス こ ん ろ	電 気 ス ト ー ブ	火 遊 び	ロ ウ ソ ク	た き 火	溶 接 器	ラ イ タ ー	そ の 他
合 計	2,214	412	368	135	100	98	54	51	46	42	41	867
高 齢 者 以 外	1,703	283	293	106	87	68	54	34	22	33	28	695
高 小 計	511	129	75	29	13	30	-	17	24	9	13	172
前 期 高 齢 者	251	56	41	16	8	10	-	3	15	7	9	86
後 期 高 齢 者	260	73	34	13	5	20	-	14	9	2	4	86

### (3) 発見・通報・初期消火等の状況

#### ア 発見・通報・初期消火状況

行為者が高齢者で建物から出火した火災 439 件の火災発見者、通報者及び最初の初期消火従事者についてみたのが表 5-1-5 です。

発見者は、「行為者」である高齢者自身が 127 件 (28.9%) と最も多く、次いで「出火した住戸の居住者」が 112 件 (25.5%)、「同一建物の居住者」が 66 件 (15.0%)、「近隣者」が 59 件 (13.4%)、「通行人」が 26 件 (5.9%) などとなっています。

通報者は、「近隣者」が 115 件 (26.2%) で最も多く、次いで「出火した住戸の居住者」が 82 件 (18.7%)、「同一建物の居住者」が 73 件 (16.6%) などとなっており、「行為者」である高齢者自身による通報は 39 件 (8.9%) で、少ない状況となっています。

最初の初期消火従事者では、「行為者」である高齢者自身による初期消火が 111 件 (25.3%) と最も多く、次いで「出火した住戸の居住者」が 85 件 (19.4%)、「同一建物の居住者」が 45 件 (10.3%)、「近隣者」が 34 件 (7.7%) などとなっています。

このことから、「高齢者」は、通報よりも、まず消火に従事する傾向が強いといえます。

表 5-1-5 発見者、通報者及び初期消火従事者の状況

区分	合計	(高齢者自身) 行為者	居住した住戸の 出火した住戸の 居住者	同一建物 居住者の	近隣 者	通行 人	同一建物 勤務員の	その他
発見者	439	127	112	66	59	26	11	38
通報者	439	39	82	73	115	36	13	81
初期消火者	439	111	85	45	34	7	8	149

行為者が高齢者で建物から出火した火災 439 件のうち、初期消火が行われた火災 311 件の初期消火従事状況と従事時の火災の状態について表したのが表 5-1-6 です。

初期消火に成功した 231 件 (74.3%) のうち、消火時の火災の状態別でみると「出火した器具又は着火物等が燃焼中」に消し止めたものが 167 件 (72.3%) と 7 割以上を占めています。

一方、消火に失敗した 80 件 (25.7%) の理由としては、「発見が遅れたため」が 13 件 (16.3%) で最も多く、次に「あせり消火できず」が 8 件 (10.0%) などとなっています。

表 5-1-6 初期消火従事状況と従事時の火災の状態

区分	合計	着火物が燃焼中	出火した器具又は立ち上がり材が燃焼中	二次的着火物が燃焼中	出火室内が延焼拡大中	状態で延焼中	天井等に火炎が達した	火元建物が炎上中	出火階が延焼中	その他・不明
合計	311	197	39	36	11	8	5	1	14	
消火成功	231	167	25	26	2	1	-	-	10	
消火失敗	80	30	14	10	9	7	5	1	4	
成功率 (%)	74.3	84.8	64.1	72.2	18.2	12.5	-	-	71.4	

<b>事例2 スプレー缶に穴を開けた際に可燃性ガスに引火し出火した火災（6月・品川区）</b>			
<b>構造・用途等</b>	耐火造 14/0 複合用途(共同住宅・保育園)	<b>出火階・箇所</b>	14階・浴室
<b>焼損程度</b>	建物ぼや マット1等 負傷者1人		
<p>この火災は、火元者（60歳代女性）が、浴室でヘアスプレー缶のガス抜きをするために穴を開けた際に、スプレー缶内に残存していた可燃性ガスが噴き出し、風呂がまの種火が可燃性ガスに引火し火災となったものです。</p> <p>自動火災報知設備の鳴動により隣室の住人が火災に気づき、火元者の住戸内に設置されていた粉末消火器と水道水により初期消火しました。</p>			

## イ 避難状況

行為者が高齢者で建物から出火した火災 439 件のうち、避難行動があったものは 66 件（15.0%）で、このうち避難に支障があったものが 17 件（25.8%）となっています。避難に支障があった火災では、死者が 4 人、負傷者が 17 人発生しています。

避難に支障があった主な理由としては、火災発見の遅れや高齢等のため自力での避難が困難であったことなどが挙げられます。

<b>事例3 電気ストーブに新聞紙が接触し出火した火災（11月・北区）</b>			
<b>構造・用途等</b>	耐火造 4/0 複合用途(共同住宅・飲食店等)	<b>出火階・箇所</b>	2階・居室
<b>焼損程度</b>	建物部分焼 1棟 20㎡等焼損 負傷者4人		
<p>この火災は、火元者（60歳代男性）が居室で電気ストーブを使用していた際、なんらかの原因により近くに置いていた新聞紙が電気ストーブに接触し出火したものです。</p> <p>火元者は電気ストーブを使用したまま寝込んだため、火災の発見、避難が遅れて受傷しました。火元者以外に2人が消防隊により救助され、他に1人が煙を吸うなどして受傷しています。</p>			

## 2 工 事

- 火災件数、焼損床面積、表面積、損害額、死傷者がそれぞれ前年より増加しました。
- 建物工事の現場で放火火災が前年と比べて増加しました。

### (1) 火災状況

「工事」の火災とは、工事現場、工事中の建物から出火した火災や、工事に関連して発生した火災をいいます。また、工事に関係した火源により、工事現場以外の場所から出火した火災（以下「近隣火災」という。）も含まれます。

工事現場や工事中の建物では様々な火気が使用され、多量の可燃物や危険物類が持ち込まれています。

また、工事に絡んで建物の防火区画や避難施設が撤去されていたり、警報設備や消火設備の機能を停止していたりする場合がありますほか、多数の工事関係者等の出入りがあります。このため、出火危険、延焼拡大危険及び人命危険が大きいと考えられます。

#### ア 年別火災状況

工事関連火災の年別火災状況をみたのが表 5-2-1 です。平成 25 年中の工事関連火災は 136 件で、前年と比べて 22 件増加しています。

また、焼損床面積は 1,193 m<sup>2</sup>で前年と比べて 643 m<sup>2</sup>増加し、焼損表面積は 622 m<sup>2</sup>で前年と比べて 216 m<sup>2</sup>増加しています。

死者は 3 年ぶりに 1 人発生し、負傷者は 29 人で、前年と比べて 10 人増加しています。

表 5-2-1 年別火災状況（最近 10 年間）

年 別	火 災 件 数									損 害 状 況				
	合 計	建 物					車 両	船 舶	そ の 他	焼 損 床 面 積 ( m <sup>2</sup> )	焼 損 表 面 積 ( m <sup>2</sup> )	損 害 額 ( 千 円)	死 者	負 傷 者
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や								
16	183	93	4	3	25	61	2	-	88	1,516	754	232,793	3	29
17	149	92	8	2	35	47	4	-	53	3,367	2,018	372,213	-	41
18	137	87	5	5	17	60	2	-	48	2,034	1,789	375,248	-	34
19	117	80	2	2	26	50	2	-	35	469	565	139,654	-	16
20	120	73	1	3	24	45	2	-	45	735	1,222	313,885	-	26
21	124	68	2	-	26	40	1	-	55	689	449	100,085	-	29
22	91	55	1	-	14	40	2	-	34	673	1,263	89,519	1	22
23	110	61	-	1	23	37	2	-	47	372	1,642	147,688	-	20
24	114	66	1	3	18	44	5	1	42	550	406	155,358	-	19
25	136	84	3	2	23	56	4	-	48	1,193	622	449,266	1	29

## イ 工事別発生状況

工事現場から出火した火災 136 件の工事種別と作業区分についてみたのが表 5-2-2 です。  
以下、工事別に発生状況をみていきます。

表 5-2-2 作業区分別の工事種別

作業区分	工 事 種 別															
	合 計	建 物 工 事					設 備 工 事						土 木 工 事			
		小 計	建 物 新 築 工 事	建 物 解 体 工 事	建 物 改 装 工 事	建 物 補 修 工 事	小 計	電 気 工 事	機 械 器 具 設 備 工 事	昇 降 設 備 工 事	管 工 事	そ の 他 の 設 備 工 事	小 計	道 路 舗 装 工 事	鉄 道 ・ 地 下 鉄 工 事	そ の 他 の 土 木 工 事
合 計	136	111	51	26	23	11	17	7	3	1	1	5	8	3	1	4
溶 接 ・ 溶 断 作 業	47	37	8	19	7	3	6	-	2	-	1	3	4	-	1	3
電 気 作 業	17	8	1	2	5	-	9	7	1	-	-	1	-	-	-	-
塗 装 作 業	6	5	1	-	1	3	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
床 張 り ・ 壁 張 り 作 業	6	6	3	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
配 管 作 業	3	3	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
掘 削 作 業	3	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
ア ス フ ァ ル ト 溶 解 作 業	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
そ の 他	6	4	-	1	-	3	1	-	-	1	-	-	1	1	-	-
火 災 と 作 業 と の 関 係 な し	47	46	36	3	5	2	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-

## (7) 建物工事の火災

建物工事の火災は 111 件（81.6%）発生しています。この中で工事種別の状況をみると、最も多いのが新築工事の 51 件（45.9%）、次いで解体工事の 26 件（23.4%）、改装工事の 23 件（20.7%）などとなっています。

建物工事の火災で作業区分別にみると、最も多いのが溶接・溶断作業で 37 件（33.3%）発生し、このうち工事種別をみると、解体工事が 19 件（51.4%）、次いで新築工事が 8 件（21.6%）、改装・補修工事が合わせて 10 件（27.0%）となっています。改装工事・補修工事は、建物を使用したままの状態で行われる場合が多く、他の工事と比べて火災が発生した際の人命危険は高いといえます。

建物工事のなかで、作業に関係なく発生した火災は 46 件（41.4%）で、このうち放火が 33 件（71.7%）、たばこと配電線が各 4 件（8.7%）などで、放火が 7 割以上を占めています。また、放火 33 件のうち 27 件（81.8%）が、新築工事の火災です。新築工事現場は施錠ができないことや、照明等がなく暗いこと、工事資材や廃材など燃えやすい物が多量にあることなどから、放火されやすい環境下にあるといえます。

### (イ) 設備工事

設備工事の火災は17件(12.5%)発生しています。内訳は、電気工事が7件(41.2%)、機械器具設備工事が3件(17.6%)などとなっています。

### (ウ) 土木工事

土木工事の火災は8件(5.9%)発生しています。内訳は、道路舗装工事が3件(37.5%)などとなっています。

### (エ) 近隣火災

近隣火災は5件(3.7%)発生しています。このうち4件(80.0%)は、建物新築工事で足場の単管が線路上の架線と接触したことで地絡により出火しています。

## ウ 出火建物の状況

工事に係る火災のうち建物から出火した火災は81件で、出火場所の用途をみると、政令用途部分から出火したものが17件(21.0%)、政令用途以外から出火したものが64件(79.0%)となっています。

政令対象物の使用中の建物で工事を行う場合、建物の管理権原者は、防火管理者や工事関係者と協議し、工事中における消防計画を作成し、防火管理体制の強化を図らねばなりません。さらに、消防用設備等の機能を停止して工事を行う場合は、必ずその代替措置をとることが必要です。

政令用途以外の内訳をみると、工事中建物が31件(48.4%)、住宅が15件(23.4%)、使用中建物の工事部分が10件(15.6%)、共用部分が8件(12.5%)となっています。

<b>事例 新築中の住宅が放火で全焼した火災 (7月・世田谷区)</b>			
<b>構造・用途等</b>	耐火造 3/0 新築中建物	<b>出火階・箇所</b>	敷地内
<b>焼損程度</b>	建物全焼1棟 200㎡焼損		
この火災は、新築工事中の住宅敷地内に置かれていたダンボール等のごみに、何者かが放火し出火したものです。			
出火時間は、作業員が帰宅し、付近の人通りが少なくなった深夜23時頃でした。			
放火されたダンボール等が置かれていた場所は、防じん・防護用囲いが張られているだけで未施錠であり、だれでも近づける状態でした。			

## (2) 出火原因

主な出火原因と作業区分についてみたのが、表5-2-3です。

### ア 主な出火原因

主な出火原因で最も多いのは、アセチレンガス切断器、電気溶接器、ガス切断器等の溶接関係の火災で36件発生し、前年と比べて2件減少しています。

次いで、工事機器関係が24件発生し、前年と比べて6件増加しています。内訳は、「ブタンガストーチバーナ」が6件、「研磨機」が5件、「投込湯沸器」、「ガスバーナ」が各3件などとなっています。

電気設備機器は23件で、前年と比べて2件増加しています。内訳は、「配電線」が6件、「配線用遮断器」が4件などとなっています。

表 5-2-3 主な出火原因別と作業区分

出火原因		作業区分									
		合計	溶接・溶断作業	電気作業	床張り・壁張り作業	塗装作業	配管作業	掘削作業	アスファルト溶解作業	その他	火災と作業との関係なし
合計		136	47	17	6	6	3	3	1	6	47
溶接関係	小計	36	36	-	-	-	-	-	-	-	-
	アセチレンガス切断器	16	16	-	-	-	-	-	-	-	-
	電気溶接器	9	9	-	-	-	-	-	-	-	-
	ガス切断器	6	6	-	-	-	-	-	-	-	-
	アセチレンガス溶接器	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-
	溶融片ガス切断器	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
工事関係	小計	24	9	1	5	4	1	2	1	1	-
	ブタンガストーチバーナ	6	1	-	1	3	1	-	-	-	-
	研磨機	5	5	-	-	-	-	-	-	-	-
	投入湯沸器	3	-	-	3	-	-	-	-	-	-
	ガスバーナ	3	-	-	-	1	-	-	1	1	-
	電気ドリル	2	-	1	-	-	-	1	-	-	-
	電気のこぎり	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	エンジンカッター	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	アセチレンガス圧接器	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
	熱風機（ホットエアガン）	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
電気設備	小計	23	-	13	-	-	-	1	-	2	7
	配電線	6	-	2	-	-	-	-	-	-	4
	配線用遮断器	4	-	4	-	-	-	-	-	-	-
	屋内線	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-
	コンデンサ	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	充電式電池	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	太陽光発電装置	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	引込線（低圧）	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	気中開閉器	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
	コードコネクタ	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
	交通機関内配線	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
	断路器（ジスコン）	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
	冷暖房機	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	生ごみ処理機	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
蛍光灯	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
放た	火	33	-	-	-	-	-	-	-	-	33
た	ば	こ	4	-	-	-	-	-	-	-	4
そ	の	他	9	2	2	-	2	1	-	-	2
不	明	明	7	-	1	1	-	1	-	-	3

## イ 作業区別発生状況

最近5年間の作業区別火災状況をみたものが表5-2-4です。

平成25年中は、溶接・溶断作業が47件で最も多く、作業に関係しない火災47件を除く作業区分中（89件）の5割以上（52.8%）を占めています。次いで、電気作業が17件、床・壁張り作業及び塗装作業が各6件などとなっています。

表5-2-4 作業区別発生状況（最近5年間）

年別	合計	作業区分									
		溶接・溶断	電気	床・壁張り	塗装	配管	掘削	アスファルト溶解	焼却	その他	作業関係なし
21	124	56	8	6	3	1	-	5	1	17	27
22	91	37	14	4	6	2	4	2	-	9	13
23	110	56	7	3	3	3	3	4	-	4	27
24	114	45	10	7	5	3	1	4	1	19	19
25	136	47	17	6	6	3	3	1	-	6	47

## ウ 溶接・溶断作業

### (7) 溶接・溶断作業の火災状況

作業区分で最も多かった溶接・溶断作業について詳しくみていきます。

溶接・溶断作業の火災は47件で、最近5年間では増減を繰り返しています。平成25年の内訳は、「アセチレンガス切断器」が16件（34.0%）と最も多く、次いで「電気溶接器」が9件（19.1%）、「ガス切断器」が6件（12.8%）などとなっています。

### (4) 溶接・溶断器の着火物と飛散距離

溶接・溶断作業の火災で、火花や熔融片が飛散、落下することによって発生した火災は37件です。その時の着火物について表5-2-5からみると、「くず類」が12件、「合成樹脂」が7件、「木質物」が5件などとなっています。これらの着火物は、工事に伴って発生するものや、作業現場周辺に置かれているもので、日頃から作業環境を整理し、消火器具等を整えておくことが大切です。

表5-2-5 溶接・溶断器の着火物

着火物	件数
合計	37
くず類	12
ごみくず・木くず等	12
合成樹脂	7
合成樹脂製品等	7
木質物	5
木材・木製品	5
野積み	3
木切れ・廃材	3
紙・紙製品	2
ダンボール等	2
軸組材	2
柱	2
その他	6

表5-2-6 着火物までの飛散距離

飛散距離	件数
合計	37
50cm未満	19
50cm以上1m未満	8
1m以上2m未満	2
2m以上5m未満	4
5m以上	4

飛散距離を表 5-2-6 からみると、50cm 未満が 19 件と最も多く、次いで 50cm 以上 1 m 未満が 8 件などとなっています。

一般的に溶接・溶断時の火花の温度は、鋼材で 1,200~1,700℃といわれており、距離が 5 m 以上離れていても可燃物への着火の危険性があります。

## エ 作業関係以外の出火原因

表 5-2-3 のとおり、工事現場での火災で、直接作業との関係がない火災は 47 件発生し、そのうち放火が 33 件（70.2%）で最も多く 7 割以上を占め、前年と比べて 19 件増加していることから、ここでは、放火についてみていきます。

出火箇所と着火物についてみたものが表 5-2-7 です。

放火火災 33 件のうち、建物から出火したものは 23 件（69.7%）で、放火の 7 割近くを占め、「工事中建物」が 19 件、「建物の外周部」が 3 件、「廊下」が 1 件となっています。

建物以外から出火したものは 10 件で、「敷地内」が 8 件、「空地」、「防じん・防護用囲い」が各 1 件となっています。

着火物をみると、「紙・紙製品」が 12 件で最も多く、建築現場で使用される防水シート、工事で使用した資材や梱包していたダンボール等に放火されています。

出火時間が不明の 8 件を除いた 25 件の火災について放火の時間帯をみると、17 件（68.0%）が夕方の 18 時台から早朝の 5 時台までに発生しています。

表 5-2-7 放火の出火箇所と着火物の状況

出火箇所		着火物								
		合計	紙製品	壁材・床材等	木材・木製品	合成樹脂及び成型品	くず類	繊維製品	木切れ・廃材	不明
合計		33	12	5	3	3	2	1	1	6
建物	小計	23	8	5	1	2	1	1	-	5
	工事中の建物	19	7	3	1	1	1	1	-	5
	建物の外周部	3	1	2	-	-	-	-	-	-
	廊下	1	-	-	-	1	-	-	-	-
建物以外	小計	10	4	-	2	1	1	-	1	1
	敷地内	8	3	-	2	-	1	-	1	1
	空地	1	1	-	-	-	-	-	-	-
	防じん・防護用囲い	1	-	-	-	1	-	-	-	-

### 3 着衣着火

- 火災による死者は前年と比べて増加しました。
- 火災による死者8人のうち7人は高齢者でした。
- ガステーブル等により最も多く発生しています。

#### (1) 火災状況

着衣着火火災とは、何らかの火源により人の意志に反して、身につけている衣類に着火した火災をいいます。例えば、調理中のガステーブルの火が衣服の袖口に着火したり、灯明の火が和服の袂に着火するなどの火災が該当します。

着衣着火火災の年別火災状況は表 5-3-1 のとおりです。

平成 25 年中の着衣着火火災は 71 件で、前年と比べて 14 件減少しています。

火災種別では建物火災が最も多く、62 件 (87.3%) 発生し、建物火災のうちの 58 件 (93.5%) がぼや火災となっています。これは着衣着火という性質上、火災の初期に人が対応したことによるものですが、死傷者の発生率は極めて高く、平成 25 年中は死者が 8 名発生しています。

月別の発生状況をみると、7 月と 12 月が 11 件で最も多く、次いで 1 月が 8 件などとなっています。

表 5-3-1 年別火災状況（最近 10 年間）

年 別	火災種別									焼 損 床 面 積 ( $\text{m}^2$ )	焼 損 表 面 積 ( $\text{m}^2$ )	損 害 額 (千円)	死 者	負 傷 者
	合 計	建 物					車 両	船 舶	そ の 他					
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や								
16	101	84	5	1	4	74	1	1	15	856	190	211,803	10	87
17	101	92	3	2	6	81	1	-	8	355	44	65,213	14	88
18	85	72	2	1	4	65	4	-	9	320	8	44,461	5	86
19	74	61	-	1	7	53	-	-	13	99	26	25,302	8	72
20	71	62	3	-	4	55	-	-	9	245	31	37,097	6	64
21	66	51	2	-	-	49	1	-	14	246	58	9,748	2	61
22	55	43	-	-	-	43	1	-	11	-	-	2,994	3	58
23	81	67	1	-	-	66	1	-	13	85	-	7,439	6	83
24	85	76	1	1	2	72	-	-	9	117	132	11,213	4	81
25	71	62	-	1	3	58	-	1	8	63	11	8,286	8	65

#### (2) 出火原因

主な出火原因と死傷時の状態別についてみたのが表 5-3-2 です。

主な出火原因で最も多いのは、「ガステーブル等」で 30 件 (42.3%) 発生し、「大型ガスこんろ」の 1 件を含めて、調理器具が原因となった火災は 31 件 (43.7%) で、これは着衣着火

火災全体の4割以上を占めています。次いで「ライター」が7件(9.9%)、「ロウソク」が6件(8.5%)、「たばこ」及び「花火」が各3件(4.2%)などとなっています。

死傷者の発生状況を死傷時の状態別にみると、「家事従業中」が32人(死者2人、負傷者30人)で最も多く、次いで「作業中」が9人(死者1人、負傷者8人)、「飲食中」が7人(死者1人、負傷者6人)などとなっています。

最も多い「家事従業中」では、その大半が調理中にパジャマ、シャツ、セーター等上衣の袖や裾に着火しており、このうち「ガステーブル等」によるものが25人(78.1%)と8割近くを占めています。

「作業中」では、電気関係工事等で作業中に出火して着衣に着火したケースなどで、「初期消火中」では、手ではたくなどして消火する際に受傷したケースがあります。

表 5-3-2 主な出火原因と死傷時の状態別状況

区 分	合 計	主 な 出 火 原 因									死 傷 時 の 状 態							
		ガステーブル等	ライター	ロウソク	たばこ	花火	ガストーブ	たき火	電気ストーブ	その他	家事従業中	作業中	飲食中	採暖中	休憩中	就寝中	初期消火中	その他・不明
火災件数	71	30	7	6	3	3	2	2	2	16	中	中	中	中	中	中	中	中
死 者	8	4	1	1	-	-	-	1	1	-	2	1	1	2	-	-	-	2
負 傷 者	65	27	6	7	4	2	2	2	-	15	30	8	6	3	5	-	1	12

## ア ガステーブル等

ガステーブル等によるものは30件(42.3%)で、前年と比べて6件減少しています。

最近のガステーブルは大型化し、バーナが3口以上ある多口バーナのものが普及しており、バーナの火をつけたままやかんと鍋を取り替えようとした際に、バーナの炎により袖の部分に着火するなどの事例が発生しています。

また、普通のガステーブルでも上部の棚等に置いてある物を取る際や、やかんで湯沸し中にガステーブルの周囲を清掃している際に、袖や裾に着火するなどの事例が発生しています。

これらガステーブルの中には、バーナの1口が3.5kWを超える強い火力を備えているものがあり、比較的小さい鍋や、やかんをかけて強火で使用したために、炎が鍋底の外側にあふれ出て、周囲の可燃物に接炎しやすい状態となっていたケースが少なくありません。

こうした「あふれ火」状態の増加に加えて、ゆったりとしたホームウェアや生地が細かい起毛状になっている衣服や素材等は、ガステーブル等を使用中に炎が接触していることに気付かず、着衣着火するケースがあるので注意する必要があります。

## イ ライター

ライターによるものは7件(9.9%)発生し、前年と比べて2件減少しています。出火原因としては、飲酒後に喫煙しようとしてライターを点火させた際に手元がくるい、着ていたシ

シャツ等に着火させてしまったものや、ズボンのポケットにライターを入れたまま座ったため、誤ってスイッチが入り着火したものなどがあります。

## ウ ロウソク

ロウソクによるものは6件(8.5%)発生し、前年と比べて1件増加しています。出火原因としては、仏壇や祭壇に灯明を灯し、線香などを供えようとした際に誤って灯明の火が着衣に着火したものなどがあります。

### (3) 火災による死傷者

着衣着火火災の死傷者73人を受傷程度別でみたものが表5-3-3です。

身につけている衣服等に着火する事象であるため、着衣着火による火災は死傷者の発生率が非常に高いものとなっており、平成25年中は71件のうち67件で死傷者が発生しています。

死者は8人で、前年と比べて4人増加しており、着衣着火火災での死者の発生率は11.3%と前年よりも6.6ポイント増加しています。一方、負傷者は前年と比べて16人減少し65人発生しています。

死傷者のうち、高齢者の数は、死者が7人(87.5%)、負傷者が24人(36.9%)となっており、死者の9割近くが高齢者となっています。

また、受傷程度別にみると、高齢者は着衣着火による火災での受傷程度が重くなる傾向がみられます。着衣着火による受傷防止策として、防災製品の衣類(パジャマ等)を着用することも一つの方法です。

表5-3-3 程度別受傷状況

区	分	合計	死亡	重篤	重症	中等症	軽症
合計		73	8	5	17	20	23
高齢者以外		42	1	2	8	14	17
高齢者		31	7	3	9	6	6
高齢者の占める割合(%)		42.5	87.5	60.0	52.9	30.0	26.1

#### 事例 ガステーブルを使用中に着衣に着火し出火した火災(9月・大田区)

構造・用途等 防火造2/0 住宅 出火階・箇所 1階・台所

焼損程度 建物ぼや 着衣1 雑巾若干焼損

この火災は、住宅の1階台所から出火したものです。

出火原因は、火元者(50代女性)がガステーブルを使用してやかんでお湯を沸かしていた際に、ガステーブル上部に設置されている換気扇の汚れに気付き、手を伸ばして掃除をしようとした時に着衣に着火し出火したものです。同居している息子が女性の着衣が燃え上がっているのを発見し、浄水器の水をかけて消火しました。